

## 第百三十五話 武士道精神の発露！敵国トップの死に哀悼の意

日本人の心には今なお脈々と武士道精神が生きている。戦争という極限のなかでも、遺憾なくそれが発揮された事例は枚挙に暇ない。日露戦争時の乃木大将の敵将ステッセル將軍への会見はその精華である。同様の事例は多々あるものと思料するが、本稿では、大東亜戦争時の最後の第42代内閣総理大臣であった鈴木貫太郎の事例を紹介する。

### 1 鈴木貫太郎（1968/1/8～1948/4/7）略歴

日清・日露戦争に従軍した海軍軍人、海兵14期生。海軍大将。部下からは「鬼貫」と呼ばれた。予備役編入後侍従長（1929(S4)年）となり、二二六事件で奇禍に遭い、瀕死の重傷を負った。爾後、枢密院議長等を歴任、小磯國昭首相の後を受けて内閣総理大臣に就任した。1945(S20)年4月7日、時に77歳2ヶ月であった。今現在に至るも最高齢での総理就任である。表面的には兎も角、鈴木は自分の内閣を「終戦内閣」とする決意だった。8月14日ボツダム宣言受諾、15日、日本は終戦を迎えた。鈴木は、8月17日総辞職した。1948(S23)年4月17日、肝臓癌で薨去、享年81であった。



### 2 米国F・ルーズベルト大統領の突然死と鈴木首相の弔意

(1) 1945(S20)年、3月10日の東京大空襲の余煙燻り、硫黄島栗林兵団は玉砕（3月26日）し、沖縄では死闘が繰り広げられている最中の4月12日、米国F・ルーズベルト大統領が脳卒中で突然他界した。鬼畜米英の首魁とみられていた大統領の突然の死（世界を震撼させた事件）に対する日独の対応は全く異なった。

(2) 独のヒトラーは、ラジオ放送を通じ、「扇動者であり、愚かな大統領として歴史に残るであろう。運命は歴史上最大の戦争犯罪人ルーズベルトを地上より遠ざけた。」等と述べた。

(3) 一方、鈴木貫太郎首相は、同盟通信社の短波放送により、「今日、アメリカがわが国に対し優勢な戦いを展開しているのは亡き大統領の優れた指導があったからです。私は深い哀悼の意をアメリカ国民の悲しみに送るものであります。しかし、ルーズベルト氏の死によって、アメリカの日本に対する戦争継続の努力が変わるとは考えておりません。我々もまたあなた方アメリカ国民の覇権主義に対し今まで以上に強く戦います。」という談話を、世界へ発信している。

(4) この鈴木首相の談話に深く感動した米国に亡命中の文豪トーマス・マンは、いたたまれず、英BBCで「ドイツ国民の皆さん、東洋の国・日本には、なお騎士道精神があり、人間の死への深い敬意と品位が確固として存する。鈴木首相の高らかな精神に比べ、あなたたちドイツ人は恥ずかしくないですか」との声明を発表した。

ニューヨーク・タイムズも鈴木首相の談話を驚きをもって報じ、スイスの新聞も「敵国元首の死に哀悼の意を捧げた日本の首相は、誠に立派だ。これこそ日本武士道精神の発露だ。ヒトラーが、この偉大な指導者の死に、誹謗の言葉を浴びせたのに比べ、何という大きな相違か」との記事を社説に載せた。

また世界各国で、首相の哀悼の意の表明は、大きな反響を呼んだのである。

3 米国新聞の論調は、鈴木内閣の出現が平和への序曲であったと認識している由、確かに古武道的な鈴木貫太郎大将でなければ、極めて困難な局面を乗り越えられなかったであろう。正に、武士道を体現した人物である。

\* 現に戦っている相手に対して敬意をもって対するのが、武士道精神でもある。死者を鞭打ち、墓を暴く国もあるが、我が国武士道はさようなことは断じて許さない。死者は敵味方関係なく鄭重に扱われるべきである。